The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「瀟湘八景」の伝来に関する新知見 : 平安時代における瀟湘イメージを中心に
Author(s)	武, 瀟瀟
Citation	デザイン理論. 2017, 70, p. 21-34
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/65047
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「瀟湘八景」の伝来に関する新知見
── 平安時代における瀟湘イメージを中心に

武　　瀟　瀟

キーワード
瀟湘八景　平安文学　屈原　湘妃
Eight Views of the Xiaoxiang Region, Heian literature, Qu Yuan, Goddesses of the Xiang River

１．瀟湘の定義の再確認
２．中国における瀟湘地域の文化的なコンテキスト
　2.1　瀟湘地域に関する文学的伝統
　2.2　中国における八景成立以前の瀟湘を主題とする絵画
３．平安時代における瀟湘地域に対する捉え方
　3.1　平安時代の瀟湘詩文
　3.2　平安時代の瀟湘絵画

はじめに

本稿は，日本の中世以降に流行する瀟湘八景（しょうしょうはっけい）という主題の伝来について，日中の文学，美術に関する同時代の文献資料の分析を通して，従来とは異なる新しい見解を提出するものである。瀟湘八景（平沙雁落，遠浦帰帆，山市晴嵐，江天暮雪，洞庭秋月，瀟湘夜雨，煙寺晩鐘，漁村夕照）とは13世紀に日本に伝来した中国の水墨山水画の画題であり，文献と遺品から，15，16世紀に瀟湘八景を主題として夥しい数の絵画が制作され，大流行していた様子が窺える。

これまでの日本の瀟湘八景に関する研究は，瀟湘八景が伝来して以降の，即ち中世以降の文献と作品にもとづいている。

一方，中国における近年の研究では，中国では，瀟湘八景についての考え方が成立する以前に，瀟湘地域は文化史上において，すでに重要な意味をもっていたことが指摘されている。日本の平安時代の文献を調べた結果，中国におけるこの瀟湘地域に対するイメージは，いわゆる瀟湘八景図が広く受容される室町時代以前に日本に伝来しており，これまでの先行研究で指摘されているよりもかなり早くから日本で絵画化された可能性が高いことが明らかになる。

よって，本稿では，室町時代水墨画の定型ともいえるいわゆる瀟湘八景図が伝来する以前の「瀟湘イメージ」の受容について紹介し，瀟湘八景の伝来についての日本における従来の見方の修正を図りたい。

本稿は第58回全国大会（2016年７月31日，於：京都精華大学）での発表に基づく

１．瀟湘の定義の再確認

「瀟湘八景とは，中国宋代，長江中流域の洞庭湖とそこに流れ込む湘江（及びその支流である瀟水）一帯の風景」と堀川貴司氏が簡潔でなお精密に定義している一方[1]，2015年の香雪美術館における瀟湘八景図の特別展の解説によると「中国・湖南省を流れる二つの河（瀟水と湘水）と，これらが合流する洞庭湖の景勝地を絵画化したもの」[2]と解釈されている。また2016年に笠間書院で出版された『杜甫全詩釈注』では「瀟湘」を「洞庭湖に注ぐ瀟水と湘水が合流する所」と定義している。美術史と文学分野の両分野において，「瀟湘」が一体なにを指すのかについて，普遍的，統一的に認識されているとは言い難い。日本における瀟湘イメージを語る前に，瀟湘の定義を再確認する必要性があると思われる。以下，現地調査した地理上の視点と文献に見られる言葉の意味から，瀟湘の定義について検討してみたい。

まず，「洞庭湖に注ぐ瀟水」や「これら（瀟水と湘水）が合流する洞庭湖」という誤解を解きたい。地図で確認できるように（図１），洞庭湖は中国湖南省の北にあり，瀟水は湖南省の南にあり，洞庭湖では合流していない。湖南省の南から北へ流れる湘江は，洞庭湖に注ぐ。瀟水は湘水の数多くの支流の一つであり，湘江と一緒にして呼ぶほど重要な支流とはいいがたい。

図１　湖南省地図

筆者は2016年３月に現地調査したところ，二つの川の合流する永州市から洞庭湖の北側に位置する岳陽市への移動が新幹線で２時間半かかった。つまり，「洞庭湖で二つの川が合流する」という説とは異なり，二つの川が合流する地点は洞庭湖からはかなり離れた場所である。

次に，文学分野における優れた先行研究にもとづき，文献上で見られる「瀟」という言葉の意味を確認し，「瀟湘」の定義について再検討したい[3]。

先行研究でも指摘したように[4]，「瀟湘」の二つ目の「湘」が湘江を指すことは確かであるが，一つ目の「瀟」は二つの意味を持っている。

一つは名詞として，「瀟水」という川の名称を意味する。瀟水は湖南省南の九疑山に発し，永州市で湘江に合流する。これが日本での通説となっている。しかし，「瀟」の字は形容詞として「清らかなそして深い」という意味ももっている。つまり，「瀟湘」は，「瀟水と湘江の二つの川」と「清らかな湘江」という二つの解釈が可能である。一つ目の「瀟」が川の名称として正式に使われるようになったのは北宋以降になる。10世紀後半に編纂された『太平寰宇記』には，地理書におけるもっとも早い例であり，そこに，瀟水（永）州というまちの西にあり，營水とも呼ばれると記されている[5]。また，17世紀から19世紀にかけて編纂された『大清一統志』には，瀟湘という言い方は古来あるが，古い本には「瀟水」という名が見えなく，唐の時代の柳宗元が書いた「愚溪詩序」に初めて，「瀟水」という言葉が登場した，とある[6]。つまり，北宋以前においては，「瀟水」は依然として「營水」とよばれていた。非公式に「瀟水」は營水の別称として唐の時代に使われ始めるが，瀟湘の用語は紀元前の『山海経』にすでに見られることから[7]，營水が瀟水と呼ばれ始めるよりも遥かの昔のことであり，この「瀟」は川を意味しているとは考えられない。

一方，「瀟」を形容詞として解釈する事例は，６世紀の地理書『水経註』に見られる。作者・酈道元は「瀟湘」について，「瀟者，水清深也[8]」と書いている。ここでの瀟の意味は水が清らか，かつ深い様子を明確に示している。また，酈道元はさらに４世紀の文献『湘中記』から，湘江の清らかな様子を描く段落を引用し：「湘川清照五六丈，下見底石，如樗蒲矣，五色鮮明，白沙如霜雪，赤崖若朝霞，是納瀟湘之名[9]」，つまり，湘江は水の底の石さえよく見えるほど清らなことから，「瀟湘」という名を得たという経緯を説明している。このことから，少なくとも，４世紀に瀟は形容詞として使われており，「瀟湘」は「清らかな湘江」だと解釈されていることがわかる。

また，筆者が『全宋詞』を探ってみたところ，南宋時代の張孝祥が隆興２年（1164）書いたの詞の中に，「行盡瀟湘到洞庭（瀟湘を行き尽くし，洞庭に辿り着く）」という一行を見出すことができた[10]。前述したように，瀟水が洞庭湖に直接に注いでいるわけではないため，ここの「瀟湘」は清らかな湘江と解釈するべきであろう。この詞は瀟湘八景が中国で流行していた

南宋時代に作成されたことから，その時代では，瀟は河の名前であることを否定することはできないものの，瀟湘は清らかな湘江を意味すると考える方が妥当である。

以上の文献により，「瀟湘」が二本の川を指すという考え方は，少なくとも南宋時代には一般的ではなく，「清らかな湘江」と捉える方が自然であったことが明らかとなる。

また，近年，湖南省は観光業を振興するために，図２に示したように，八景の具体的な場所を指定している。これらは明清の詩や地方志を根拠にするもので[11]，瀟湘八景の成立よりかなり時代が下がるが，少なくとも，中国では，今も昔も，瀟湘八景が洞庭湖周辺に限らず，より広い範囲の景色だと認識されてきたことがわかる。

以上のことから瀟湘は，瀟水と湘江の二つの川を指すというよりも，「清らかな湘江」を本意として，瀟湘八景は今の湖南省の南から北の洞庭湖に注ぐまでの湘江全流域として解釈するべきであることを確認できた。

２．中国における瀟湘地域の文化的なコンテキスト

2.1　瀟湘地域に関する文学的伝統

中国における瀟湘地域に関する文学的伝統について，Alfreda Murck 氏と衣若芬氏の優れた先行研究をふまえながら，簡略に紹介しておきたい[12]。

中国では，瀟湘の地をテーマとした詩文は数え切れないほどあるが，その源になるものは，

図２　現代瀟湘八景の所在地

凡そ以下Ａ，Ｂ二つのタイプに分類できる。

Ａ．湘妃伝説からの離愁別恨（以下Ａタイプ）

中国上古の皇帝・堯は帝位を舜に譲り，二人の娘・娥皇と女英を舜の妃にした。やがて舜は蒼梧の地で亡くなり，二人の妃は夫を探しに出たが，湘江の辺りに着いた頃，夫の死を知り，絶望のあまり，湘江に身を投げた。湘江のほとりの竹は彼女たちの涙に染まり，斑竹（湘妃竹）になった。二人は後に湘江の女神（湘妃，湘夫人と呼ばれる）になった，という伝説である。このような悲劇的な神話の舞台であった瀟湘地域は閨怨，別離，悼亡の詩文によく登場する[13]。

Ｂ．屈原からの貶謫帰隠（以下Ｂタイプ）

中国の戦国時代の楚の国の官僚だった屈原は，彼の才能に嫉妬した人々による誹謗によって無実の罪を着せられ，瀟湘地域へ流罪となる。やがて楚の国が秦の国により滅ぼされたことを知った時，湘江の支流汨羅江に身を投げた。瀟湘地域を舞台とした文学の伝統は，屈原が書いたといわれる「九歌」「湘夫人」「離騒」などの作品が源となっている。また屈原の人生そのものも瀟湘文学のテーマとなる。『楚辞』に収められた「漁父」には屈原の最後が記されている。この内容は後世の瀟湘詩詞に頻繁に引用されるため，ここで簡単に紹介しておきたい。

屈原が湘江の岸に沿って歩いていたとき，舟に乗っていた漁父に，あなたは三閭大夫ではないか，なぜ追放されたのかと尋ねられた。「世を挙げて皆濁り我れ獨り清む，衆人皆酔ふて我れ獨りむ。」このような世の流れに身をまかせるより，魚の餌になるほうがましだと答えた。そして漁父は「滄浪之水清兮，可以濯吾纓，滄浪之水濁兮，可以濯吾足（滄浪の水清まば，以て吾が纓を濯ふべし。滄浪の水濁らば，以て吾が足を濯ふべしと）」[14] と歌いながら，去っていた。その後，屈原は確かに自分の言葉通り，川に身を投げ，自殺した。

国と君主に尽くし，腐敗した政治に頭を下げるより，自ら死を選ぶという屈原の崇高なイメージは後世の文人の共感を呼び，インスピレーションを与えてきた。それ以来，中国では，瀟湘は常に「左遷」「追放」「帰隠」などのニュアンスを持ち，後世の文人，特に政治に失脚した官僚たちは瀟湘に関する数多くの詩文を作っている。

2.2　中国における八景成立以前の瀟湘を主題とする絵画

この二つの文学的な伝統によって，瀟湘地域は古来数えきれないほど詩文に詠まれてきた。古来「詩画一律」の伝統を持つ中国において，詩によく登場していた瀟湘地域が絵画に描かれるようになるのは自然な流れであったと考えられる。瀟湘地域がいつ頃から絵に描かれるよう

になったかは不明であるが，現存する最も古い瀟湘を描く作品は五代の南唐（937-975）の画家・董源が描いた「瀟湘図」（北京故宮博物院）とされている[15]。

このほかにも，唐と五代の詩文を探ると，瀟湘を描いた絵と屏風がこの時代には多く存在していたことが立証されている[16]。ここで，筆者はこれまでほとんど注目されてこなかった，杜甫の「奉先劉少府新画山水障歌」をあげたい。タイトルからもわかるように，これは杜甫が天寶15年（756）に，友人劉氏が描いた山水障子のために作った賛であり，内容を確認すると，瀟湘を題材とした障子絵，つまり，屏風ないし衝立に書かれた絵であったことが明らかである。

「無乃瀟湘翻〔中略〕漁翁暝踏孤舟立，滄浪水深青溟闊〔中略〕不見湘妃鼓瑟時，至今斑竹臨江活（乃ち瀟湘の翻るなからんや〔中略〕漁翁暝に孤舟を踏みて立つ，滄浪水深くして青溟闊く〔中略〕見ずや湘妃の瑟を鼓する時を，今に至りて斑竹江に臨みて活く）」[17]

この引用から，夕暮れの水面に漁父が乗る一艘の小船や，水辺に茂る竹林などモチーフが描かれた風景画であることがわかる。また，杜甫はおそらくこのような瀟湘風景をみて，前述した湘妃と屈原の物語を想起したであろうし，このような瀟湘イメージは文学作品に限らず，絵画の制作と鑑賞にも及んでいることが分かる。

３．平安時代における瀟湘地域に対する捉え方

3.1　平安時代の瀟湘詩文

寛平６年（894）に遣唐使が廃止されるまでの間，日中における文化的交流が盛んであったことはいうまでもないだろう。そこで，平安時代において，前述した瀟湘地域のこの文化的コンテキストが日本に伝わったかどうかまず確認したい。調査の方法としては，「瀟湘」という二文字だけではなく，「湘妃」「洞庭」「屈原」など，広い瀟湘地域の文学的伝統に関する言葉をキーワードとして，平安時代の文献を探る作業をした結果，見いだすことのできた30点の史料を表１に整理した（便宜上１番－30番に番号付け）。

表１に示したように，少なくとも，９世紀から，漢詩，賦，散文などのジャンルに亘って，瀟湘を主題とした夥しい作例が見られる[18]。そこで，まず注目したいのは，瀟湘地域と季節の関係である。30点の史料の内，20点は季節が判明する。春を描く２点除いて，18点は秋の風景を描写していることから，90パーセントが秋であることがわかる。さらに，それらの詩文は主題によって以下の四種類に分類できる：

① 閨怨（けいえん）：帰らぬ夫の帰りを待ちわびる女性の悲しみを表す詩文（Aタイプ）。

『文華秀麗集』に収められた嵯峨天皇が書いた一首を例として挙げたい：

「洞庭葉落秋已晩。虜塞征夫久忘歸。賤妾此時高樓上。銜情一對不勝悲。」[19]（８番）

洞庭湖の木の葉が散り落ちて秋はすっかりくれてしまい，戦場に出かけた夫は久しく帰ることを忘れ，残された妻は高い楼台の上にいて，悲しい気持ちを心にこめて，月にむかうと悲しみに耐えられないという内容である。ほかに９番と10番も，洞庭湖の秋の景色を描写し，帰らぬ夫の帰りを待ちわびる女性の悲しみを主題としている詩文である。「洞庭葉落秋已晩」の出典は屈原が書いた「湘夫人」の中の「帝子降兮北渚，目眇眇兮愁予，嫋嫋兮秋風，洞庭波兮木葉下（帝子北渚に降る，目，眇眇として予を愁へしむ，嫋嫋たる秋風，洞庭波たち木葉下る）」[20] とされる。人間から神への恋歌であるのか，男神から女神への恋歌であるのか，あるいは屈原の楚懐王への忠誠を寓意としての歌であるのか，謎に満ちたこの「湘夫人」は明確な解釈は不明であるが，洞庭湖の秋の風景をもって悲恋の気持ちが表われている。洞庭湖と秋の景色，そして悲しい恋心と結びつく伝統はおそらくここから来たのであろう。

② 詠物：竹あるいは竹製品を詠う詩文（Aタイプ）。

21番に「賦庭前松竹」という竹を詠む詩に「移得根辞湘浦浪」という一行があり，また，７番の「題竹床子」にある「落涙新如昔植湘」と18番の「贈筆呈裴大使」にある「管染湘妃竹露紅」[21] の句から，前述した湘妃伝説の中の斑竹の伝説は日本でもよく知られており，竹や竹で作った筆，さらに，竹製の床（榻）などを詠む時，自然と瀟湘地域のこの伝説が連想されるであろう。

③ 謫居，帰隠：屈原と共感し，不遇，追放，旅愁などの感情を表し，或いは政治への不満を訴える詩文（Bタイプ）。

菅原道真の「敍意一百韻」（６番）を挙げたい。菅原道真は昌泰４年（901）に，藤原時平の讒訴によって，都から追放され，この「敍意一百韻」は大宰府への苛酷な旅を描写し，左遷の悲憤と運命の無常を嘆く作品である。瀟湘地域に関する二句をみると

「長沙々卑濕　湘水々齋潾（長沙の沙卑く濕べり，湘水の水齋潾たり）」[22]

「長沙々卑濕」は中国前漢の文人賈誼（紀元前200-168）が，瀟湘地域の長沙に謫居した時，長沙は土地が低くて，じめじめしており，長くない自らの余命を悲しんでいること，「湘水々齋潾」は前述した屈原のことを踏まえて詠んでいる。

この例から，日本では，政治に失脚した官僚も屈原の経歴に共感して，瀟湘地域に関す

る詩文を作っていたことが分かる。このような詩文はほぼ全部Ｂタイプの出典を使っているが，17番の「竹悲湘浦空留涙」の一句はＡの出典を借りながら，「懐才不遇」の悔しさを表している[23]。屈原に関する出典だけではなく，瀟湘地域全般がこのような象徴的な意味を持ち，この「不遇」「左遷」「追放」「旅愁」「謫居」「帰隠」などのニュアンスは平安時代から詠まれ，中国と同様の意味で使われてきたことがわかる。

④　悲秋：落葉，秋月，菊など秋の景物を詠う詩文。

この種類の詩は，前述した①閨怨と③謫居，帰隠と重なる例が多い[24]。先に見たＡタイプ（計13個）とＢタイプ（計12個）の他に[25]，どちらにも属しないように見える詩は６首ある。その内，番号５（洞庭波白，燕塞草衰），12（庭柯槭兮傷情。洞庭湖幽），22（洞庭木落秋波白。彭沢菊残夜雪晴），25（葉思呉江之楓。波憶洞庭之水），27（胡塞地寒煙色変。洞庭天霽雨声幽）は，湘妃と屈原の出典を直接には引用していないが，洞庭湖の秋を詠う。これは前述した屈原の「湘夫人」の中の「洞庭波兮木葉下」に基づいているとを言える。つまり28番以外全てはＡＢ二つの文学伝統に影響されている。

3.2　平安時代の瀟湘絵画

さて，これほど多く書かれた詩文が，絵の主題になった可能性があるかどうか，以下の三つの例で検討していきたい。

①　漁父詞屏風

道真が九世紀の末に書いた「漁父詞」は屏風画の題詩であり（抱膝舟中醉濁醪，此時心與白雲高，潮平月落歸何處，滿眼魚蝦滿地蒿[26]），詩の内容を反映していた絵画が存在した可能性が高い。

道真が書いたこの漁父詞にみられる，「濁り」や「酔う」など言葉は屈原のことを連想させ，明らかに前述した『楚辞』の「漁父」から影響を受けている。

想像の域を越えないが，詩に即して，おそらく，よもぎが茂る水辺に孤舟と月夜が描かれた唐絵山水屏風画だったであろう。後世の瀟湘八景にもよく使うモチーフであることに注目したい。

②　坤元録屏風

また，『古今著聞集』巻十一には，下記の段落が見られる。

392　良親屏風二百帖に繪を畫く事并びに四條大納言色紙形を書く事

能通朝臣，絵師良親に，屏風二百帖に繪をかゝせたりけり。その中に坤元録屏風をば，良親相傳の本にてなんかき侍ける。大女御參給ける時，二條殿にまいらせさせてんげり。色紙形は四條大納言ぞかゝれける。更に又，爲成をしてうつされけり。正本は，一の人の御相傳の物に侍にこそ。又和漢抄は，屏風には中卷水をかき，上に唐繪をかき，下ににやまと繪をかきたりけり。唐繪の屏風は，實範つたへたりけるを，成章に沽脚しにけるとぞ[27]。

この文献から，藤原能通は絵所絵師の良親に二百帖の屏風をえがかせ，その内に坤元録屏風と和漢抄屏風が含まれていることが分かる。

『坤元録』は中国で『括地志』という名前でよく知られ，唐の太宗貞観13年（639）太宗の第４子，魏王李泰（618-653）が編纂した地理書である。この本は早く日本に伝来し，これに基づいた屏風も作られていた。家永三郎氏は，平安時代の唐絵の中には中国の名所が描かれており，この坤元録屏風もそのような当時中国の名所を描いた風景画であったとする[28]。

『日本紀略』には，天暦３年（949）[29] 大江朝綱（886-957）が『坤元録』から二十ヵ所を選び，巨勢公忠に八帖の屏風に絵を描かせ，朝綱と橘直幹，菅原文時の三人がこの屏風の詩を作ったことが記されている。

仰左大弁大江朝臣，令撰坤元録，為詩題廿首。

仰采女正臣巨勢公忠，令図屏風八帖。仰朝綱朝臣，文章博士橘直幹，大内記菅原文時作詩。式部大輔大江維時撰定之。右衛門佐小野道風書之。

大江匡房（1041-1111）の言談を記録した『江談抄』第四巻によると，この坤元録屏風に，洞庭湖の景色を詠う詩が描かれていたことが分かり[30]，『江談抄』の菅原文時の「巌前木落商風冷，浪上花開楚水清，青草旧名遺岸色，黄軒古楽寄湖声」（70）と『和漢兼作集』の橘直幹の「洞庭　初識騒人催楚思，洞庭寒葉灑秋風」（844）の二首とされている[31]。洞庭湖は瀟湘地域にあるため，坤元録屏風に瀟湘地域が描かれた蓋然性が高いといえよう。

③　和漢抄屏風

また，『古今著聞集』に記された「和漢抄屏風」は，家永氏によると，『和漢朗詠集』の文を絵画化した屏風で，中央に水を描いて境とし，上下に，和文と漢文とに対応して，それぞれ大和絵と唐絵を配したものと推定される。寛仁２年（1018）に藤原道長（966-1028）の四女・藤原威子（999-1036）の入内屏風のために，藤原公任（966-1041）が本文ならびに和歌を撰

進し，二百帖屏風の色紙形に書いたもので，後の『和漢朗詠集』になるものといわれている[32]。

その『和漢朗詠集』の中に，瀟湘地域に関する詩が二つ見られる。

403　張読（唐）

竹斑湘浦，雲凝鼓瑟之蹤，鳳去秦台，月老吹簫之地

323　後中書王

雲衣范叔羈中贈，風櫓瀟湘浪上舟

403の作者は中国唐の時代の詩人張読である。前述した湘妃たちは湘江の岸で琴を弾いていたが，この音色はいかにも悲しく，月さえ雲に隠れてしまうというような内容となっている。

323の作者は，村上天皇（926-967在位946-967）の七子，後中書王（964-1009）である。この詩には，また前述した「漁父」の内容が書かれている。

もともと屏風絵の色紙形に書くために編纂された『和漢朗詠集』の中に，瀟湘地域を主題とする詩が存在することから，瀟湘地域が屏風に描かれた可能性は十分にあるといえるだろう。

また『和漢朗詠集』は，平安から鎌倉・南北朝にかけて，貴族，僧侶の子弟教育に用いられた初学書の一つであり，漢文学のみならず，日本文学あるいは日本文化全般に広く影響を及ぼしたため[33]，瀟湘地域に関する和漢の詩は日本において，広く流布したといえよう。

結　論

本稿では，まず瀟湘が，瀟水と湘江の二つの川を指すというよりも，「清らかな湘江」を本意として，今の湖南省の南から北の洞庭湖に注ぐまでの湘江全流域を指すことを明確化した。つぎに中国における瀟湘地域に関する文学的伝統を湘妃伝説からの離愁別恨（Aタイプ）と屈原（Bタイプ）からの貶謫帰隠という二種類に分類し，そして唐時代の題画詩から，この文学的伝統を反映する瀟湘地域の絵画が中国においては既に存在していたことを指摘した。その上で，瀟湘地域の文学的伝統に関する言葉をキーワードとして，平安時代の文献を探る作業をし，詩文の主題によって，①閨怨（Aタイプ），②詠物（Aタイプ），③謫居・帰隠（Bタイプ），④悲秋（A・Bタイプ）に分類し，瀟湘地域における悲劇的な神話伝説（Aタイプ）や屈原をはじめとする「政治的失意」「追放」「帰隠」（Bタイプ）といった文学的伝統が，日本と中国で共有されていたことを明らかにした。最後に，これまで瀟湘八景との関わりから考察されてこなかった平安時代のテキストに記録される「漁父詞屏風」「坤元録屏風」「和漢抄屏風」の三つの作例から，A，B二つの文学的伝統に基づく絵画がかつて存在し，瀟湘地域は平安時代にはすでに中国の名所として屏風絵に描かれていた可能性が高いことを指摘した。その結果，瀟

湘八景が中世に日本に伝来し一気に大流行した背景の前段階として，実は平安時代にすでに文化的な土台が築かれていたということを指摘することができた。今後は，このような瀟湘イメージが中世の瀟湘八景絵画とどのような関連性があるのかについて，追究していきたい。

注

1　堀川貴司『五山文学研究：資料と論考』（笠間書院，2011年）172頁。

2　2015　香雪美術館「絶景　瀟湘八景図 ── 山水画を読み解く」特別展のパンフレット。

3　瀟湘の語源については次の文献を参照：松尾幸忠「瀟湘考」（『中国詩文論叢』14号，1995年），衣若芬「瀟湘 ── 山水畫之文學意象情境探微」（『中國文哲研究集刊』20号，2002年）。

4　同上。

5　「瀟水在（永）州西三十歩，源出營道縣九疑山，亦曰營水，至麻灘與永水合流，一百四十里，入湘水，謂之瀟湘」，樂史『太平寰宇記』（中華書局，2000年）巻116，9b 頁。

6　「瀟湘雖自古并稱，然『漢志』『水經』俱無瀟水之名。唐柳宗元「愚溪詩序」始謫瀟水上」『欽定大清一統志』（臺灣商務書局，1983年）巻282，24頁。

7　「帝之二女居之，是常遊于江淵。澧沅之風，交瀟湘之淵，是在九江之閒，出入必以飄風暴雨」郭璞（注）『山海経・中山経』（上海古籍出版社，1989年）77頁。

8　「湘水又北，經黃陵亭西，右合黃陵水口，其水上承大湖，湖水西流，經二妃廟南，世謂之黃陵廟也（中略）瀟者，水清深也。」酈道元『永樂大典本水經注』15巻（江蘇廣陵古籍刻印社，1994年）10頁。

9　同上。

10　張孝祥「浣溪沙」「行盡瀟湘到洞庭，楚天闊處數峰青。旗梢不動晚波平，紅蓼一灣紋纈亂，白魚雙尾玉刀明。夜涼船影浸疏星。」唐圭璋編『全宋詞』（中華書局，1965年）1702-1703頁。

11　鄒容，周志剛『發現另一個湖南・溯水行』（湖南科技出版社，2009年）。

12　前掲，衣若芬，193-202頁。Murck, Alfreda, *Poetry and painting in Song China: the subtle art of dissent*. Harvard-Yenching Institute monograph series. Cambridge, Mass: Harvard University Asia Center for the Harvard-Yenching Institute, 2000.

13　この伝説は『山海経』，『書經』，『孟子』，『史記』，『列女傳』，『楚辞・九歌』など文献に記されている。張京華「中国最早的爱情故事 ── 湘妃传说之六大文献系统」（『衡陽師範學院學報』４号，2007年）.

14　橋本循『注釈楚辞』（岩波書店，2013年）395-396頁。

15　なお，「瀟湘図」は明時代の董其昌が附けた題名であり，この作品について，主題，作者，時代ともに，研究者の中で意見が分かれている現状である。Barnhart, Richard M. *Marriage of the lord of the river: a lost landscape by Tung Yüan*. Artibus Asiae Publishers, 1970，丁羲元『國寶鑒讀』（上海人民美術出版社，2005年）などに参照。

16　前掲浅見洋二，58頁。前掲衣若芬205-206頁，衣若芬「瀟湘八景 ── 地方經驗　文化記憶 無何有之郷」（『東華人文学報』９号，2006年）121頁。

17 『杜甫全詩訳注』下定雅弘と松原朗（編）（講談社，2016）巻１，385-386頁。

18 なお，作者は日本人である作品のみ，『和漢朗詠集』などの中に中国の作品は含まれていない。

19 『懐風藻，文華秀麗集，本朝文粋』『日本古典文学大系』巻69（岩波書店，1980年）307頁。

20 前掲，橋本循『注釈楚辞』，113頁。

21 菅原道真『菅家文草　菅家後集』『日本古典文学大系』巻72（岩波書店，1966年）516頁。

22 前掲，菅原道真『菅家文草　菅家後集』490頁。

23 「懐才不遇」は，才能を持ちながら，それを理解してくれる主君がいないため，相応しい地位を得ることができない状況をさす。

24 ①閨怨の８，９，10番と③謫居，帰隠の４，11，13，23，26，29，30は④悲秋の中に分類できる。

25 15番はＡＢ二つの出典を使っている。

26 前掲，菅原道真『菅家文草　菅家後集』393頁。

27 橘成季『古今著聞集』『日本古典文学大系』巻84，（岩波書店，1971年）313頁。

28 家永三郎『上代倭絵全史』（墨水書房，1966年）43頁。

29 植松茂，田口和夫，後藤昭雄，根津義『古本系江談抄注解』（武蔵野書院，1978）38頁。『日本紀略』によると，天暦３年（949）だが，『江談抄』には天暦10年と記されている。関わった人々の官職によると，天暦５年（951）から，７年までとされている，後藤昭雄「坤元録屏風詩をめぐって」（『成城国文学』24号，2008年）６頁。

30 「文時坤元録屏風洞庭詩。黄軒古楽句。維時中納言難之云々。如庄子成英疏云。（天）地之間。有洞庭之野。非大湖之洞庭云々。此難頗強難歟。文章有所許歟。問。件事其詞非詩詞。為難歟。答云。此為憲之案僻事。注千載佳句注也。非件義只非大湖之洞庭之義也。」前掲『古本系江談抄注解』，37-39頁。

31 前掲『古本系江談抄注解』，7頁，本文中の番号は本書に使用されている番号に基づく。

32 藤原公任『和漢朗詠集』『日本古典文学大系』巻73，（岩波書店，1971年）14-19頁。

33 堀川貴司『五山文学研究 ── 資料と論考』（笠間書院，2011年）４頁。

図版出典

図１　http://www.g111.cn/UserData/2821/profile/090313102512828.jpg　筆者加筆

図２　https://zh.wikipedia.org/wiki/%E6%BD%87%E6%B9%98%E5%85%AB%E6%99%AF#/media/File:Xiaoxiangbajing.jpg　筆者加筆

表１　平安時代文献に瀟湘地域に関する情報一覧表

番号	文集名		年代	作品名	作者名	本文	キーワード	ジャンル	季節	主題	出典類型
1	『菅家文草』	巻四 287	仁和年間 (885-889)	亜水花	菅原道真 (845-903)	恰似湘妃臨岸泣　欺誣蜀錦帶波浮	湘妃	詩	春	旅愁	A
2	〃	巻四 315	〃	水聲	〃	石稜流緊如成曲　疑是湘妃怨水中		〃	－	謫居　帰隠	A
3		巻五 363	寛平年間 (889-898)	漁父詞　屏風画也	〃	抱膝舟中醉濁醪　此時心與白雲高	屈原	〃	－	謫居　帰隠	B
4	〃	巻六 443	昌泰年間 (898-901)	九日後朝、侍朱雀院、同賦閑居樂秋水、應太上天皇製。並序。	〃	聞昔瀟湘逢故人　在今樂水詎爲新	瀟湘	〃	秋	悲秋　帰隠	B
5	〃	巻七 517	寛平２年 (890)	清風戒寒賦。以霜降之後、戒爲寒備爲韻。	〃	洞庭波白　燕塞草衰	洞庭	賦	秋	悲秋	
6	『菅家後集』	484	延喜年間 (901-923)	敍意一百韻。五言。	〃	長沙々卑濕　湘水々奫潫	湘江	詩		追放　旅愁 政治不満	B
7	〃	501	〃	題竹床子。通事李彦環所送。	〃	空心舊爲遙踰海　落涙新如昔植湘	斑竹	〃	－	詠物 (竹製品)	A
8	『文華秀麗集』	137		内史貞主の「秋月歌」に和す。一首。	嵯峨天皇 (786-842)	洞庭葉落秋已晩　虜塞征夫久忘歸　賤妾此時高樓上　銜情一對不勝悲	洞庭	〃	秋	悲秋　閨怨	A
9	〃	138		滋内史が「秋月歌」に和す。一首。	桑原腹赤 (789-825)	漸入高樓正徘徊　葉映洞庭波裡水。	〃	〃	秋	〃	A
10	〃	139		神泉苑九日落葉篇。一首。	嵯峨天皇	儵忽復逢秋氣悲　商飆掩亂吹洞庭　墜葉翩翻動寒聲　寒聲起洞庭波　隨波泛泛流不已	〃	〃	秋	〃	A
11	〃	140		神泉苑九日落葉篇。應製。一首。	巨勢識人 (795-？)	洞庭隨波色泛映　合浦因風影飄揚　(中略) 劉安獨傷長年歎　屈平多增遲暮憂	洞庭 屈原	〃	秋	悲秋	B
12	『本朝文粋』	巻一賦, 樹木		落葉賦	紀齊名 (959-999)	庭柯槭兮傷情　洞庭湖幽	洞庭	賦	秋	悲秋	
13	〃	巻一賦, 幽隠		兎裘賦	前中書王 (914-987)	爲執政者枉被陷矣　君昏臣諛　(中略) 繞沅湘而傷楚　欲問明訓於先賢	湘江	〃	秋	謫居　帰隠 悲秋	B
14	〃	巻三對冊	天暦３年 (949)	辨山水。從五位上行文章博士橘朝臣直幹問。	橘直幹 (10世紀)	夔子之國　屈原之鄉	屈原	大学寮対策の問	－		B
15	〃	〃	〃	文章得業生正六位上大江朝臣澄明對	大江澄明 (10世紀)	斑竹臨岸　還礙賈誼之船	斑竹	大学寮試験の対策の答え	秋		A B
16	〃	巻十一序丁, 和歌序		新撰和歌序	紀貫之 (873-946)	愁雲之影已結　湘濱秋竹	湘江 斑竹	和歌序	秋		A
17	『扶桑集』	巻七 40		橘才子以予為失時。贈答之中屡有此句。餘乃不然。故述来由。復次本韻。	源英明 (911-939)	竹悲湘浦空留涙　龍怨鼎湖遂隔雲	斑竹 湘浦	詩	－	懷才不遇	A
18		巻九 114		贈筆呈裴大使	江相公 (大江音人、811－877)	毫含婁誕松煙緑　管染湘妃竹露紅	斑竹 湘妃	〃	－	詠物 (竹製品)	A
19	『和漢朗詠集』	323		－	後中書王 (964-1009)	雲衣范叔羈中贈　風櫓瀟湘浪上舟	瀟湘	〃	－	謫居　帰隠	B
20	『本朝無題詩』	巻二 52		－	藤原通憲 (1106-1159)	庾嶺春梅還謝粉　洞庭秋葉更慙黄	洞庭	詩	秋	詠物 (牡丹)	A

21	〃	巻二 64		（部立下位）賦庭前松竹	藤原実範 （11世紀）	移得根辞湘浦浪　偃来蓋揖泰山嵐	斑竹 湘浦	〃	－	詠物 （松竹）	A
22	〃	巻三 159		（部立下位）翫月	惟宗高言 （？－？）	洞庭木落秋波白　彭沢菊残夜雪晴	洞庭	〃	秋	悲秋	
23	〃	巻三 172		－	藤原明衡 （989-1066）	漁人哥冷洞庭暁　商客涙寒巴峡秋	〃	〃	秋	悲秋　詠月	B
24	〃	巻七 482		－	藤原周光 （1079-？）	湘水廟荒空暮竹　首陽祠古只春薇	斑竹 湘水	〃	春	旅愁	A
25	『経国集』	巻一 10		重陽節神泉苑賦秋可哀応制	淳和天皇 （786-840）	葉思呉江之楓　波憶洞庭之水	洞庭	賦	秋	悲秋	
26	『江吏部集』	巻一 6		七言秋夜陪右親衛員外亜相亭子守庚申同賦秋情月露深詩一首并序	大江匡衡 （952-1012）	自添楚屈原之涙者也方今朝士大夫陪此座者	屈原	賦	秋	悲秋　懐才不遇	B
27	〃	巻三 101		暮秋同賦草木揺落応教　以秋為韻。七言十韻。	〃	胡塞地寒煙色変　洞庭天霽雨声幽	洞庭	詩	秋	悲秋	
28	『江談抄』	巻四		－	藤原実兼 （1085-1112）	文時坤元録屏風洞庭詩（中略）有洞庭之野　非大湖之洞庭云々（中略）非件義只非大湖之洞庭之義也	〃	談話記録	－		
29	〃	〃	天暦３-10年 （949-956）	－	菅原文時 （899-981）	巌前木落商風冷　浪上花開楚水清	洞庭	詩	秋	悲秋　懐古	B
30	『和漢兼作集』	巻八 844	〃	洞庭	橘直幹 （10世紀）	初識騒人催楚思　洞庭寒葉灑秋風	〃	〃	秋	〃	B

＊作者は日本人である作品のみ，『和漢朗詠集』などの中に中国の作品は含まれていない。
＊前の例と共通する情報を「〃」で省略する。